

まねっこを繰り返し、歌唱表現の楽しさを感じながら表現する子ども

— 小学1年「まねっこでうたおう～やまびこっこ～」の実践から —

1 題材のねらい

教師や友だちの声を聴き合い、交互にまねをして歌うことのおもしろさを感じ取りながら、強弱やリズム、フレーズに気を付けて楽しく模唱することができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

1年生の子どもたちは、歌うことや音楽に合わせて体を動かすことが大好きである。教師がピアノを弾き出すと、それに合わせて歌を歌い出したり、リズム打ちをしたりする。次は、音楽の授業があった日に書かれた子どもの日記である。

5じかんめに、おんがくをしたよ。「うみ」のうたがうたえてうれしかったよ。またやりたいよ。(児童A)
 きょう、おんがくですきなうたがあったよ。「しろくまのジェンカ」はだいすきだよ。いつもおんがくだったらしいな、とおもっているよ。(児童B)

児童Aのように、子どもたちは新しい歌に出合うことを喜び、「もう1回歌いたい!」と初めての歌でも何度も歌おうとする。また、児童Bのように、気に入った歌があれば1時間のうちに何度も歌うことを喜ぶ。

子どもたちはこれまでに、歌唱教材「かたつむり」「うみ」で、拍の流れにのって歌う活動をしてきた。そこでは、拍子打ちをしたり、体を揺らしたりしながら歌うことで、拍の流れを感じ取りながら友だちと一緒に楽しく歌うことができた。また、「リズムあそびをしよう」の学習では、教師の示すリズムを模倣して手拍子をしたり、「じゃんけんぽん」「げんこつやまのたぬきさん」「しろくまのジェンカ」「ぶんぶんぶん」それぞれの楽曲で拍の流れにのって歌いながら、様々なリズムを手や打楽器で打ったりする活動をした。特に「じゃんけんぽん」の歌の後にあるじゃんけん部分では、拍の流れを示す伴奏がなくても、それまでの拍の流れを意識し続けたままじゃんけんゲームをすることができており、拍の流れを感じ取って表現する力が身に付いてきている。

歌声に意識を向ける姿も見られ始めている。必要以上に大きな声で歌う友だちがいると、耳をふさいでしまったり、「一緒に歌っても気持ちよくない。」と口にしたりする姿が見られた。また、1学期の終わりに聴いた合唱団の演奏について、「私もあんなにきれいな声で歌えるようになりたい。」「みんなの声がひとつになっているみたい。」という憧れをもつ子どもも多かった。

このように、本学級の子供たちは、よりよい歌唱表現を支えるための力を少しずつ身に付けてきており、歌声をそろえたいという意欲をもっている。「音楽って楽しいな」「歌うことって気持ちいいな」と思える活動を通して、歌唱表現の楽しさを感じながら表現を工夫する力を育てていきたいと考えて授業実践を行っている。

(2) 本題材の内容と音楽科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本学校園音楽科では、子どもたちが美しい表現を追い求め、全体の響きに調和させて、音楽を味わいながら豊かに表現していく姿を目指し、特に「歌唱」の学習を中心に研究を進めている。初等部前期に当たる1年生の段階においては、「歌唱」分野での思考力・判断力・表現力を「自分の歌声や発音に気を付けて、歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、拍の流れやフレーズを感じ取った

りして歌う力」と考えている。音楽を感覚的にとらえ、自分の歌声に気を付けて感じたことや思いを表現することで、歌唱表現の楽しさを感じながら表現を工夫する力を育てることにつなげていきたいと考えた。

本題材では、これまでの経験や子どもが身に付けてきた力を基盤にして、教師や友だちの歌声を聴いて模唱する活動を展開することにした。指導においては、学習指導要領の内容A表現(1)ア「範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりすること。」に関連させながら学習を進めていった。

学習を展開するに当たっては、[共通事項]の反復に重点を置いて進めるために、歌唱教材「やまびこごっこ」(おうちやすゆき作詞/若月明人作曲)を選択した。「やまびこごっこ」は、先に歌った人の歌い方をまねてまったく同じように繰り返して歌うおもしろさがある。一対一、一対複数、複数対複数など、様々な人数構成で、拍の流れにのって楽しく交互唱することのできる教材である。また、強弱、リズム、フレーズといった要素に変化をもたせて歌うことで、その工夫のよさを感じ取りながら、互いの声を聴き合い、模唱することのおもしろさや楽しさを体感できる教材である。一人一人が思いをもって歌い方を工夫しながら歌うことや、友だちの工夫を聴き、その工夫のよさがることは、思考力・判断力・表現力を育成する上で大切な場面になると考えた。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

① まねっこ(反復)のおもしろさを体で感じ取ることができるために

子どもたちがまねっこのおもしろさを体で感じ取り、それを歌唱表現にいかしていくためには、まねをして歌いたいという意欲をもつことが大切である。そのために、第1次では、「やまびこあそび」をする。活動場所を、やまびこのように声や音が響き、体を動かすために十分な広さのある集会室とし、全身で模倣遊びができるようにした。教師や友だちが言った言葉や手拍子、ポーズなどの身体表現を模倣することから導入し、お互いがすぐ近くに立ったり、教室の端と端で立ったりすることにより、声や音の遠近感を楽しみながら、模倣のおもしろさに浸れるようにした。また、言葉に即興的に音程を付けたり、強弱やリズムに変化を付けたりすることで、さらにやまびこが楽しくなることに気付くようにした。この時に見付けた要素を「まねっこヒント」として残しておき、歌を工夫するポイントとして第2次でも取り上げる。

② 学び合いが深まるための場の設定

(i) 共通の要素から多様な要素へ

歌を工夫するポイントを、一つの共通な要素から多様な要素へ広げるようにした。一つの要素を追求することで、子どもは歌い方の工夫に幅があることに気付いたり、様々な歌い方が身に付いたりすると考える。さらに、要素を広げることで、子どもが「自分はこう歌いたい」という思いを素直に表現することを楽しんだり、意欲的にみんなの前に出て歌ったりすることにつながる。そこで、まず、子どもが聴き取りやすく、表現しやすい強弱に絞り、次に、リズムへと広げ、工夫をよく聴いて模唱することの楽しさを味わわせる。さらにフレーズでは、「やまびこごっこ」の最後の歌詞を「そっくりだ」「もうすこし」などの「ひみつのフレーズ」に変えて歌う。子どもたち同士がお互いの歌声のよさをよく聴いてまねっこできていたのかを思考、判断し、自分の思いを伝えることで、楽しみながら歌うことができるようにした。

(ii) よりよい音楽表現を求める活動

友だちの歌い方の工夫への気付きを共有できるよう一人対全員の場合を繰り返し、次のような場を設定することにした。やまびこ役にどこをどう歌ったと感じたのかを問い返す。また、全体をリーダー役・やまびこ役・聴き役の三つのグループに分け、聴き役は、リーダー役とやまびこ役の歌を聴き、どんな工夫をしていて、どんなところがよく模唱できているかを聴く。聴き役を取り入れる

ことで、模唱される立場、模唱する立場、模唱を聴く立場それぞれの視点で、模唱することの楽しさやおもしろさを感じながら、よく聴いて歌い、表現を工夫する力を身に付けられるようにした。

3 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学び合い）
1	「やまびこあそび」をしよう。	1	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな言葉や身体表現で「やまびこあそび」をする。 ・互いの距離を変えたり、強弱や音色、リズム、音程、速さなどを変えたりしながら、違いを感じ取って模唱する。 ・見付けた違いを「まねっこヒント」としてまとめる。
2	「やまびこごっこ」をまねっこでうたおう。	2	<ul style="list-style-type: none"> ・拍の流れにのって交互唱をする。 ・「まねっこヒント」をもとに、教師やリーダー役が付けた強弱の違いに気を付けて聴き、模唱する。
		3	<ul style="list-style-type: none"> ・「まねっこヒント」を選んで、教師やリーダー役が付けた強弱や音色、リズムなどの違いに気を付けて聴き、模唱する。 ◇やまびこ役の友だちがどんなふうに模唱しているのかを聴きながら歌う。
		4	<ul style="list-style-type: none"> ・3グループに分かれて、リーダー役の友だちの声の強弱や音色、リズムなどの違いに気を付けて聴き、模唱する。 ◇グループごとに交互唱をし、「まねっこヒント」をどんなふうに使って模唱しているのかを聴き合う。

4 授業の実際

(1) 題材との出会いの工夫 ～あそびでまねっこ（反復）のおもしろさに浸る～

本題材の導入では、「やまびこあそび」をテーマに、言葉や音の模倣遊びをすることで、まねっこのおもしろさを十分に味わうこととした。

教師から「やまびこって知ってる？」と問いかけ、やまびこについて知っていることを伝え合いながらイメージを膨らませていき、「『やまびこあそび』でリーダーのこえをまねっこしよう」というめあてを提示した。まず、遊び方がわかるように、教師がリーダーとなり、「ヤッホー」という言葉を、強弱や声の高さを工夫してみせてまねっこをした。すると、一人の子どもが「ヤッホー」と高い声で言い、それを他の子どもたちがまねっこした。その後、教師が「みんながリーダーになってまねっこしよう。」と投げかけ、一人対全員、一対一、一人対少人数など、様々な形態で遊んだ。子どもたちは、集会室の隅と隅に離れたり、近くに寄ったりしながら距離による声の聞こえ方の違いを感じながら、生き生きとまねっこを楽しんでいた。この「やまびこあそび」をする中で、子どもたちはリーダーを「ハイジ」、まねっこする側を「山のかみさま」と呼び、遊びを楽しんだ。この時間に、表現を工夫するために見付けた要素を「まねっこヒント」（図1）として子どもたちの言葉で残し、その後の活動でも使えるようにしておいた。

第1時のふりかえりは、「ハイジの声をもっとまねしたい。」「小さい声や大きい声があっておもしろい。」「高い、低いでやってみたい。」と、もっとまねっこをやりたいという思いに溢れていた。そして、子どもが「やまびこさん」と歌っていたことを取り上げ、「やまびこごっこ」の歌詞を提示した。まねっこのおもしろさに浸っていた子どもたちは、「早く歌ってみたい!」と意欲を見せた。

大きい 小さい（強弱）
 かわいいこえ おこったこえ（音色）
 たかいこえ ひくいこえ
 ふつうのたかさのこえ（高低）
 小さい“っ”があるかんじ
 きつつきみたいに（リズム）
 つながっているかんじ
 のばす（音の長さ）



図1：まねっこヒント

「やまびこあそび」の様子

(2) 「まねっこヒント」を使って ～共通の要素から多様な要素へ～

① 強弱に絞った活動

歌を工夫していく場面では、「まねっこヒント」の中から子どもが聴き分けやすく、表現しやす

い「大きい」「小さい」という強弱に絞って歌うことができるようにした。強弱の工夫を感じ取る場面で、児童Cは『大きい』が三つで、『小さい』が三つ！と、「やまびこごっこ」の六つのフレーズの強弱を聴き分けて、その数を指で示していた（図2）。

この言動が全体に広がり、子どもたちは楽しみながら強弱を聴き分けるとともに、強弱を工夫すると楽しい歌になることを感じることに繋がった。この時間に歌ったリーダーは7人で、全員が違う歌い方の工夫をしていた。それは、

因やまびこさーん
（やまびこさーん）
小まねっこさーん
（まねっこさーん）
因やっほー
（やっほー）
四よほほほほー
（よほほほほー）
四えっへへへへへへー
（えっへへへへへへー）
因まねするなー
（まねするなー）
『大きい』が三つで
『小さい』が三つ



「やまびこごっこ」の様子

図2：強弱の数値化

「大が三つ、小が三つ」「大が二つ、小が四つ」「大が一つ、小が五つ」「大が五つ、小が一つ」の4パターンであった。「大が三つ、小が三つ」が同じでも、強弱をつけたフレーズの場所は異なり、誰一人として同じ工夫をしない子どものこだわりを感じた。ふりかえりでは、「小さい声や大きい声を、ハイジとそっくりにまねすることができてよかった。」「ハイジの声をもっとまねしたい。」「まねをするのがずっと楽しかった。」と発言し、強弱だけでもいろいろな歌い方が工夫できることに気付くことができ、まねっこのおもしろさに浸る子どもの喜びが感じられた。

③ 強弱からリズム、フレーズへ広げる活動

Dくんのリズムが変わっていておもしろかったです。小さい“っ”がついているこえでもまねしてみたいです。（児童E）

これは、第2時のふりかえりである。児童Eは、友だちが強弱だけではなく、他の要素も使って工夫していたことに気付き、自分ももっと工夫してみたいと思っている。そこで、第3時では、まず、この子どものよさを広げてリズムに着目していくこととし、教師が次のように投げかけた。

T 1：みんなが今、大きい、小さいをまねして山の神様になってただけど…もっとすごい神様になれないかなあ。実はね、この前に書いてもらった振り返りカードに、Eさんがこう書いていたの。小さい“っ”がある声でやってみたくて。

児童F：きつつきみたいな声！

T 2：そう、Fさんが「きつつきみたいな声」って言ってた声ね。これでやってみない？

児童G：できる！

T 3：これができたら、ただの神様じゃあなくなるかもね。Eさん、試してみる？

強弱だけでなく、新しくリズムを工夫することで、さらに楽しい歌にしていきたいという意欲が高まり、『「スーパーまねっこ山のかみさま」になろう』というめあてが子どもたちから生まれた。以下は、リズムの工夫を共有できるように問い返した場面の授業記録である。

児童E：（リーダーの歌）やまびこさーん まねっこさーん （小さい“っ”で）やっほっ
（小さい“っ”で）よほほほほっ えっへへへへへへー （小さい“っ”で）まねするなっ

児童H：（小さい“っ”があるのが）4・（小さい“っ”がないのが）2！

児童I：（小さい“っ”があるのが）3・（小さい“っ”がないのが）3！

T 4：今のEさんの小さい“っ”がどこかわかった？わかった人？

児童J：「やっほっ」のところ。

T 5：よく聴いていたね。他にもあったかな？

児童K：「よほほほほっ」。最後に“っ”が付いていた。

T 6：さすが神様！まだあるの？

児童C：「まねするな」の時、最後に“っ”が付いていました。

T 7：すごい！よく聴いてたんだね。Eさん、3・3で合ってる？

児童E：うん。

T 8：じゃあ、もう一回みんなで確かめてみようか。

児童：（みんなで歌う）

児童H：やっぱり（小さい“っ”があるのが）3・（小さい“っ”がないのが）3だった！

一度聴いただけであったが、子どもたちは短く切った歌い方に気付いたり、まねて歌ったりすることができた。また、新たな要素も数値化して指で表していた。

次に、もっと多様な要素と出合わせ、さらに子どもたちが「スーパーまねっこ山のかみさま」になるために、教師からフレーズの工夫をしていくことを次のように提案した。

T 9：みんながちょっとずつ「スーパーまねっこ山のかみさま」に近づいてきたので、先生が、ここでもう一つやってみたいと思います。
児童F：なにに？
T 10：(模唱をした後) そっくりだー♪
児童I：最後の言葉がちがう！
T 11：さっき、先生なんて歌ってた？
児童：そっくりだー♪
T 12：どうして「そっくりだー♪」って歌ったと思う？
児童G：『大きい』『小さい』とか、小さい“っ”とかをそっくりに歌ってたから。
T 13：そうなんです。じゃあみんなも『ひみつのフレーズ』を使って歌で応えてあげよう。
児童：やるやるー！

「他にどんなふうに応えてあげられるかな？」と問いかけると、「じょうずだな」「すごいな」「山のかみさま」「まだまだよ」「がんばれよ」「もうちょっとよ」などのフレーズが次々と旋律にのって返ってきた。以下に載せているのは、子どもが模唱を聴き、「ひみつのフレーズ」を歌って返す場面の授業記録である。

T 14：誰かやってみる人…Lさん。山の神様がうまくまねできるかな。Lさん、なんて歌うかなあ？
児童L：(模唱をした後) すーごいな♪
T 15：Lさん、何て歌ってくれた？
児童：すーごいな♪
T 16：そうだったね。どうして「すーごいな♪」って歌ったの？教えて。
児童L：まねが上手だったから。
T 17：どんなところのまねが上手だったの？
児童L：最初の「やまびこさん」のところの、怒った声が上手だったから。
T 18：そうか。怒った声をよく聴いて、まねしていたことがわかったんだね。他にもヒントを使ってたよね。わかったかな？
児童I：切った感じ！
T 19：うんうん。みんなわかった？もう一回聴いてまねしてみようか。
児童：(切った感じのリズムも感じ取って模唱する)
児童M：切った感じがあった！
T 20：Lさん、いっぱい工夫していたね。神様もよく聴いてまねしていたよ。

児童Lは、「怒った声」と「切った感じ」いう「まねっこヒント」を取り入れて歌い、「すーごいな」と返した。教師は、どこが「すーごいな」と思ったのかを下線部のように掘り下げることで、子どもの工夫を全体で共有できるようにした。また、他の工夫について波線部のように問いかけ、全体で共有するためにもう一度まねっこをして、その工夫を確かめることができた。

以下は、本時のふりかえりである。

きょう、やまびこごっこをしたよ。山のかみさまに名まえがついたよ。それは、「スーパーまねっこ山のかみさま」だよ。さいごにいうことばもちがうよ。わたしは、みんなのまねっこがじょうずだったから、「山のか～みさま～」と、うたったよ。こんどの音がくでも、まねっこをたのしんでやりたいです。(児童C)

児童Cのふりかえりからは、自分が強弱、リズム、フレーズの工夫をおりませで歌い、それを友だちがよく聴いてまねしてくれていることを感じ取り、「山のか～みさま～」と歌って返したことから、そのうれしさを表現していることがわかる。このフレーズを聴いた山のかみさまも、工夫をよく聴いて歌えたことをほめてもらい、笑顔になっていた。この「山のか～みさま～」という答えには、全員が満足感をもち、「スーパーまねっこ山のかみさま」になれたうれしさを共有し、めあてを達成できた喜びをみんなで感じる事ができた。表現できる「まねっこヒント」が増えたことで、「もっと聴くぞ」という意欲が高まるとともに、自分もハイジ役をしてみたい、と希望する子どもも増えた。ふりかえりでは、「今日のやまびこごっこは、大きい声や小さい声、低い声や高い声、切った感じやのぼす感じの音がいろいろあって楽しかったな。」「次はかわいい声を使ってみようよ。」と、様々な要素を使って表現を工夫する楽しさを感じながらまねっこすることができたり、

次への意欲が高まったりする姿が見られた。

(3) 聴き役・ハイジ・山のかみさまの三つのグループに分けて繰り返し体験する

第4時では、全体を大きく三つのグループに分け、聴き役にハイジと山のかみさまのまねっこを聴いてもらうという形態で、お互いにどれくらい「スーパーまねっこ山のかみさま」になれたのかを聴き合った。まねっこして歌う人数が半分になっても、子どもたちは自信をもってどの「まねっこヒント」を使ったのかを判断し、楽しそうに歌っていた。また、教師が聴き役に、「どんなところがよくまねできていたか教えてあげよう。」と投げかけたところ、「三つのヒントを使っていたけど、ちゃんと変えて歌っていたから、スーパーだな、と思いました。」「声も同じように『大きい』『小さい』になってたけど、体もハイジと同じように揺れていて、すごいなと思いました。」というように、お互いのよくまねできているところをたくさん見付けて伝え合うことができた。聴き役をつくったことで、お互いの工夫のよさを認め合うことにつながり、のびのびと楽しそうに、気持ちよく表現することができた。

以下は、本題材を終えた後に書いたふりかえりである。

最初は、スーパーまねっこ山のかみさまにはなれなかったけど、いっぱいやまびごっこをして、よく聴いてまねしたらだんだんできてうれしかったです。いろんな声のまねができてよかったです。「じょうずだな〜♪」が2回出てきて、「スーパーになれたな。」と思いました。スーパーまねっこ山のかみさまになれてよかったです。こんなにまねっこがじょうずにできてうれしかったです。 (児童N)

児童Nのふりかえりからは、まねっこをいっぱい繰り返すことで、ハイジの声の工夫をよく聴けるようになったうれしさや、「ひみつのフレーズ」で褒めてもらうことで「スーパーになれた」と実感できた喜びが伝わる。何度もまねっこを繰り返すことで、こんなにも表現を工夫できるようになったという自信や自分の力の高まりを感じる姿がみられた。

5 成果と課題

(1) 展開計画の工夫について

導入に遊びを取り入れたことで、まねっこのおもしろさを全身で体感し、まねっこに浸ることができた。また、まねっこを繰り返すことにおいて、同じような活動を繰り返すのではなく、使う要素を強弱からリズム、フレーズへと広げたり、場の設定を工夫したりすることで、子ども自身が、自分たちのまねっこがレベルアップしたと感じられるようなステップを踏んでいけるようにした。これは、題材を通して、子どもたちが意欲的に歌唱表現を楽しむ姿につながったと考えられる。

(2) 教師のはたらきかけについて

山のかみさまが聴き取った「まねっこヒント」が、本当にそうだったのかをハイジ役に問い直すはたらきかけをした。音は残らずに消えてしまうものなので、問い直しをした後、もう一度歌って確かめる活動をした。また、「ひみつのフレーズ」を使って返す場面では、ハイジ役の子どもがなぜそのフレーズを返したのか、理由を具体的に言語化させるために掘り下げるはたらきかけをした。それによって、どこでどんな要素を使い、どのように工夫をして歌っていたのかをみんなで共有することができた。

(3) 要素の取り上げ方について

「まねっこヒント」という様々な要素を、初めは一つに絞り、そこから多様に選んでいくことで、子どもたちが即興的な表現に親しみ、音楽における思考・判断・表現力を高めることにおいても有効であった。特に、強弱については、全体で取り組んだことで、どの子も楽しんで表現できたと感じている。しかし、強弱以外の要素については、全体でじっくりと取り上げることがなかったために、十分に表現しきれない子どももいた。要素を焦点化することで、誰もが自信をもってのびのびと表現する力を身に付けていけると考えるので、取り上げ方を今後考えていきたい。

(文責 能海 麗美)